

リウマチ・膠原病内科

● スタッフ（平成27年10月1日現在）

診療科長 沢田 哲治
医局長 林 映

医師数 常勤 7名

● 診療科の特徴

リウマチ・膠原病内科が診療対象とする疾患には、関節リウマチ、抗核抗体関連膠原病（全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群、強皮症、多発性筋炎、皮膚筋炎、混合性結合組織病）、血清反応陰性脊椎関節症（強直性脊椎炎を含む）、抗リン脂質抗体症候群、血管炎症候群（大動脈炎症候群、巨細胞性動脈炎、結節性多発動脈炎、顕微鏡的多発血管炎、多発血管炎性肉芽腫症、Churg-Strauss 症候群）、成人 Still 病、ベーチェット病、リウマチ性多発筋痛症などが含まれる。これらは多彩な臨床症状をきたす全身性疾患であり、正確な診断と早期治療を要する。

当科では最新の医学情報を積極的に取り入れ、膠原病およびその類縁疾患の診療に取り組んでいる。特に、膠原病の治療は生物学的製剤や分子標的薬を中心に近年大きく進歩している。当科ではこれらの薬剤の適応を早期から積極的に考慮することで、速やかな寛解達成とその維持を目標としている。同時に、感染症や薬剤性間質性肺炎を中心とする有害事象への対応にも十分配慮している。また、膠原病は慢性再発性の経過をとり、その治療は長期にわたることが多い。従って、当科では患者の生活環境への配慮も含め、全人的な視野を持って患者とともに歩む医療の実践を心かけている。

● 診療実績

平成27年度の延べ入院患者数は196名であり、図1には入院患者の背景疾患割合を示す。入院患者の疾患別割合では関節リウマチが最も多いが、感染症や薬剤性肺炎など合併症の加療のための入院も含まれる。

外来延べ患者数は2,206名であり、図2には疾患別割合を示す。このうち初診患者数は610名である。外来患者の疾患別割合でも関節リウマチが最も多いが、人口の高齢化に伴い、リウマチ性多発筋痛症（PMR）など高齢発症の膠原病患者が増加している。

図1 平成27年度入院患者背景疾患別割合

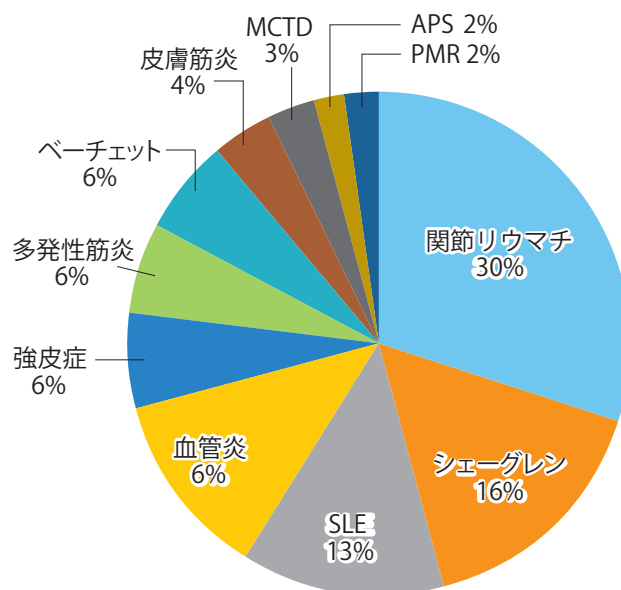


図2 平成27年度外来患者背景疾患別割合

